



小野春男《けし（課題）》



小野春男《りんごの花》

表現せんとする時、探求への苦悩は起るのだ。我が形式、自分の表現形式。（中略）
自分が表現せんとするもの、それは想念でしかなく、画面上に表はれることに於てしか完全な形をとらない。
表現せんとするものと表現との一致、これは又何んと困難なことであらう。（昭和16年1月8日）

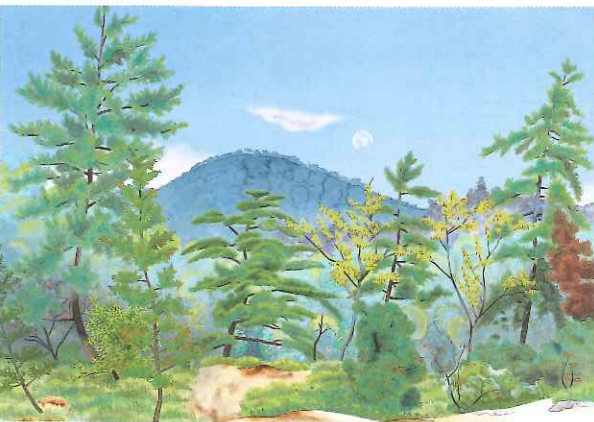
画学生小野春男と父竹喬

日本画家・小野竹喬（1889－1979）の長男である春男（1917－1943）は、昭和15（1940）年に京都市立絵画専門学校を卒業し、その翌年の第6回京都市美術展に《樹林》が入選して日本画家としての道を歩きはじめたところでしたが、同年12月の太平洋戦争の開戦により、昭和18（1943）年に26歳で戦死しています。

細面ですらりとした体つきをしており、手品が上手だったという春男の作品は、これまで無言館（長野県）に預けられていた屏風《茄子》が知られるばかりでしたが、平成25（2013）年、複数の作品と素描が小野家において発見されました。これらは、主に

風景を描いた竹喬に対して花鳥や人物も扱っており、いまだ独自の画風を確立する途上にあったのだと感じられます。また、繰り返し描かれている自画像からは、鋭く繊細な感覚の持ち主であったことが察せられます。

このたびの展覧会では、春男の17歳頃から24歳頃までの作品と素描、関連する資料、また、父親である竹喬の作品を展示します。終戦から70年となる今年、画家として大成する時間を持ちえなかった春男と、期待をかけていた息子の戦死を受けて、二人分の仕事をしようと誓った竹喬に思いをはせて頂けましたら幸いです。



小野春男《風景（月）》

僕が居なくなったとしたら。
母だけが心配である。
（昭和16年7月20日）
友達も誰れもかれも、
親父をあてにして僕と関係せるものは、
やがて僕からはなれてゆく。
（昭和16年4月29日）



小野春男《女性座像》

この絵にかかつてから三ヶ月目。
再び自然を見た時。
何んと俺の絵は概念的なのだらう。
自然はもつともつと微妙に美しい。
（昭和16年11月16日）



小野春男《人形劇》

彌生。幼時以後かつてなかつた幸福が
俺をおそふ。
すべての行動や思索がそれにかからまる。
（昭和16年12月22日）



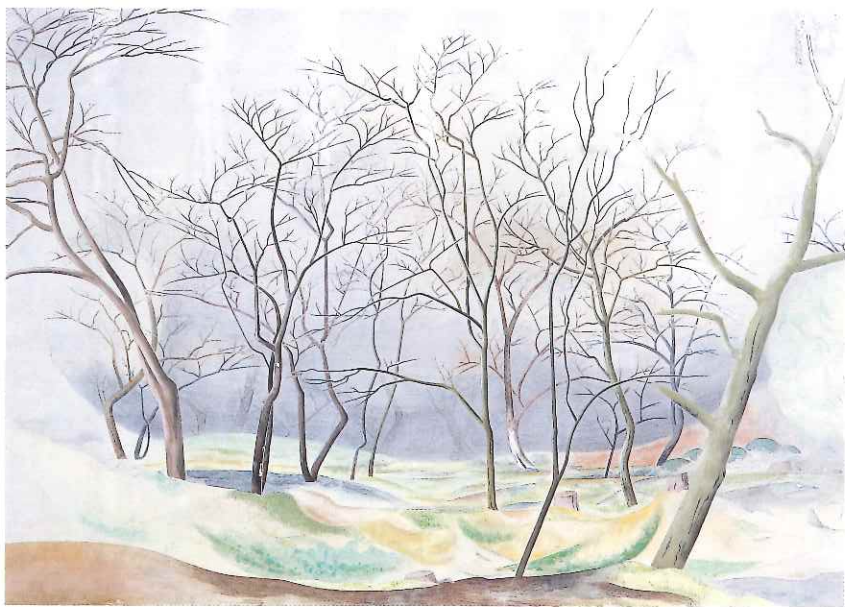
小野春男《茄子（素描）》

彌生。お前との交渉の半年が、
君に対する俺の恋情を確固たるものにした。
最早永久に消えない愛情だらう。
己れの愛情に対して確信がもてたこと。
これこそ大きな喜びなのだ。益々愛するだらう。
たしかに愛するといふことは豊かにしてくれる。
（昭和17年7月3日／日記最後のページ）



小野春男《自画像》

（昭和16年9月13日）
何んたる絵だ。線だ。
一つも思ふやうにならない。
それとも全然才能がないのだらうか。
とらはれてゐるのだらうか。



小野春男《林》



小野春男《父》

小野春男関連年表

- | | | |
|--|---|---|
| 大正 5（1916）年
大正 6（1917）年
大正 7（1918）年 | 大正10（1921）年
大正12（1923）年
昭和 3（1928）年
昭和 4（1929）年
昭和 5（1930）年
昭和 6（1931）年
昭和 7（1932）年
昭和10（1935）年
昭和11（1936）年
昭和12（1937）年
昭和13（1938）年 | 昭和14（1939）年
昭和15（1940）年
昭和16（1941）年
昭和17（1942）年
昭和18（1943）年
昭和19（1944）年
昭和20（1945）年 |
| 10月、小野竹喬（27歳）、第10回文展で《島二作》が特選。
6月22日、春男誕生。7月、竹喬とトラヨ（1896－1945）、婚姻届を提出。
1月、竹喬（29歳）国画創作協会（国展）の設立に参加、第 1 回展に《波切村》を出品。夏頃、京都市内の室町頭鞍馬口に住居を新築。
10月～翌年 5 月、竹喬（32歳）渡欧。春男は 4 歳。
9 月、関東大震災。この年、一家は等持院中町に転居。
7 月、赤字状態にあった国展の解散を発表。
10月、竹喬（40歳）かつて離脱した官展に復帰。
3 月、春男（13歳）京都市立衣笠尋常高等小学校を卒業。
9 月、満州事変。この年、等持院北町に転居。
夏、竹喬（43歳）水川禎治郎の案内で朝鮮半島に滞在。昭和 8（1933）年、9（1934）年にも訪朝。
3 月、春男（18歳）京都府立第三中学校を卒業。
10月、次女・英子が16歳で死去。
3 月、春男（20歳）京都市立絵画専門学校予科を卒業。7 月、日中戦争始まる。
5 月、国家総動員法施行。7 月、長女・悦子が日本画家・林司馬と結婚。8 月、竹喬（49歳）と春男（21歳）、赤目（三重県）を訪れる。この頃より絵画の材料難となる。
この頃から春男の通う京都市立絵画専門学校でも卒業生の多くはすぐに徴兵され入隊するようになる。
1 月、京都で絵絹の規格統制が始まる。3 月、春男（23歳）京都市立絵画専門学校を卒業、卒業制作《なんば》。10月、大政翼賛会発会式。
5 月、春男（24歳）第 6 回京都市美術展に前年の紀元二千六百年奉祝展出品作《樹林》を出品。竹喬（52歳）同展の審査員をつとめる。10月、竹喬、京都日本画家連盟において画塾・竹杖会の代表として理事の一人になる。12月、大東亜戦争勃発。
2 月、京都日本画家連盟、陸海軍へ献納画808点。理事である竹喬（53歳）は献納式に出席。
3 月、日本画家報国会および日本画製作資材統制協会が結成され、竹喬は査定委員となる。
7 月 9 日、春男（25歳）に臨時召集令状が届き15日に伏見中部第三十七部隊に入隊。12月、春男中国に出兵、竹喬は本願寺前で見送る。
1 月、竹喬（54歳）春男の武運長久を伊勢神宮で祈願。12月 2 日、春男（26歳）常德殲滅作戦において狙撃され戦死。
2 月、竹喬（55歳）春男戦死の内報を受け取る。7 月、春男の遺骨受け取りと東本願寺での告別式。
1 月、春男の母・トラヨ（50歳）死去。2 月、竹喬（56歳）京都美術協会の結成に参加、副会長となる。4 月、京都画壇で海軍軍需美術研究所設置、竹喬は資材製作指導となる。8 月、日本はポツダム宣言を受諾。 | | |

（参考文献：飯野正仁編『戦時下日本美術年表』）



竹喬夫人トラヨ（左）、婦人記者（中）、土田友徳夫人千代（右）、春男（前）



長女・悦子（左端）、次女・英子（中央）、春男（右から2人目）、母・トラヨ（右端）
昭和15年頃



召集にあたって 小野春男



春男遺骨帰還 昭和19年

遺言書を書いて置けと云ふ。
しかし僕にはたいして云ふことはない。
（昭和16年8月2日）